

シナイモツゴの すみか「守る」

長野「ぼんすけ育成会」



ため池につながる水路の泥や草を取り除く参加者

休耕田増…ため池荒廃防止へ手入れ

地元で「ぼん」の愛称で呼ばれ、絶滅が危ぶまれる淡水魚「シナイモツゴ」の保全活動が続ける長野市の「ぼんすけ育成会」は13日、信里地区のシナイモツゴが生息するため池の周辺で水路などの手入れをした。この水路とつながる近くの田んぼが今年は無くなることを受け、ため池を含む一帯が荒れて生息地が損なわれないようにする狙い。市内外の14人が作業した。

シナイモツゴは、長野市南西部

いる。

に約400カ所あるため池の1割ほどに生息する希少種。育成会員で日本学術振興会特別研究員の中野蘭さん(42)＝松本市＝によると、農家が減り、ため池の管理に手が回りにくくなると、池の中心に植物が生えやすくなる。それによって池が湿地化すると、シナイモツゴはすめなくなると指摘して

今回整備したため池も、シナイモツゴの生息が確認されている一ツ。周辺は3年前から一部が休耕田となり、残りの田んぼも今年から、所有者が高齢になり米作りを断念。ため池などは今後、管理する人がいなくなる可能性があるという。

公園の動植物の保護などに取り組むNPO法人「生態工房」のメンバーらが作業。ため池につながる水路にたまった泥や草を手で取り除くと、せき止められていた水の流れが戻った。ドジョウやヤゴを見つけて喜ぶ人もいた。

中野さんは「地元の人が生活を通して守ってきた自然こそが、生物を保護する上で大切」とした上で、「何もやらなければシナイモツゴは絶滅してしまう。地元の人と話し、対応に理解を得ていきたい」と話した。生態工房の佐藤博事務局長は「手を加えたことでどんな変化があるか、また見に来たい」とした。

この日は育成会のほか、都内で